

農業



令和5年10月号
会誌 No. 1708

目次

巻頭言

技術開発の理念……………生源寺真一 3

論壇

バイオスティミュラントは農薬？……………大谷 敏郎 4
—定義と評価法の必要性—

春期中央農事講演会

農研機構の現況とこれから……………久間 和生 6
—農研機構の研究開発戦略—

表彰農家訪問

大都会で市場ニーズを的確に捉えたポット花壇苗生産……………腰岡 政二 24
—並木一重さんを東京都足立区に訪ねて—

食を楽しむ

写真で苦手な野菜が好きになる……………網野 文絵 32

研究の最前線

佐賀県で大発生したタマネギべと病を克服するまでの道のり…菖蒲信一郎 33
—地道な共同研究の積み重ねが、産地を動かす起点となる—

農業・農村の現場から

北海道平取町における担い手育成……………宇津木 友 44
—新規参入者の受け入れについて—

世界の農業は今

オーストラリアにおけるコメ産業の持続性……………佐々木 緑 50
—課題への対応力—

私の経営と志

山口県美祢市美東町で水稻・麦・カボチャ栽培……………藤井 亮平 56
—携わることへの矜持—

農家の気持ち

農業の転機……………長谷川紀子 58
—私の人生にともった新たな価値の光—

統計情報

2022（令和4）年新規就農者調査結果…………… 59

農政情報

…………… 60
大日本農会だより…………… 61
編集部から…………… 62

会誌『農業』に関するアンケート

表紙写真：シリーズ世界農業遺産

みなべ・田辺の梅システム（和歌山県みなべ町・田辺市）

和歌山県「みなべ・田辺地域」は日本国内の50%以上の生産量を占める日本一のウメの産地です。とりわけ主力品種の南高梅は日本のウメを代表するトップブランドになっています。

みなべ・田辺地域では、薪炭林^{しんたんりん}を残しつつ、山の斜面に梅林を配置することで、崩落防止などの機能を持たせながら高品質なウメが生産されていること、ウメの花の受粉におけるニホンミツバチの利用や里地・里山の自然環境の保全により、豊かな農業生物多様性を維持していることなどが評価され、2015年12月に世界農業遺産「みなべ・田辺の梅システム」として認定されました。

また、薪炭林にあるウバメガシを原料に製炭された「紀州備長炭」は南高梅と並んで全国に誇る有名ブランドであり、この備長炭を作る「炭焼き」も世界農業遺産に評価されたポイントです。

この地域では、ウメの生産農家が収穫したウメを梅干しにする1次加工（写真：天日干し）まで行うため、南高梅は栽培の段階から良質の梅干しになるように育てられます。また、2次加工から販売まで行うウメ加工業者は地域内に70社以上あり、梅干しだけでなく梅酒や梅ジュースなどさまざまな商品の開発を行い、ウメの消費拡大に取り組んでいます。

（写真および文：みなべ・田辺地域世界農業遺産推進協議会事務局 みなべ町役場うめ課）